

25 . 太陽の神の愛 (リサール州)

昔々、イスナという名の美しい少女がいて、パシ川の冷たい水で、夜明け前に、毎朝泳いでいました。冷たいきれいな水が、彼女の若い体にはねかかり、彼女はさわやかな気持ちになりました。

イスナは近くの木の樹液で彼女のかよわい体を洗いながら、甘く歌いました。その樹液は水に触れると香水のついた石鹸のように泡立ちました。

彼女が体から甘い樹液をすすぐと、イスナは川岸に座り、動物の歯でできた櫛を使って、長い黒髪をときました。

彼女の長い黒髪は、磨いた黒檀のようでした。イスナは、甘く匂うサンパギダの花を摘んで、それを束ねて長い輪にし、首に優雅に飾り、流れる髪にからませました。

この毎日の儀式を終えると、イスナはいつも、全身に新しい活力が与えられ、新鮮な気持ちになるのです。

イスナが、神に注ぐ新しい火の太陽の暖かな光を感じた時、それは、長い夜の眠りのあと、地平線から昇るので、彼女は次の仕事の時であることを知るのでした。

彼女は大きなテラコッタの瓶を持ち、縁までいっぱい川から新鮮な、ほとぼしる水を満たしました。彼女は瓶を頭の上ののせて、森の中の近くの空き地に歩いて行き、朝の鳥たちの甘いコーラスが、彼女のすべての足音に合わせて、鳥たちはさえずって、新しい日の夜明けを歓迎しました。

森の空き地では、イスナは、のどの渇いた植物や花に、テラコッタの瓶から、甘い水を与えました。すると、イスナは、空き地のかわいい色鮮やかな花をいくつか取り、緑の草の中に横たわっている小さな枝と編んで小さなリースを作りました。イスナはリースを取って、川の口にある聖なる岩につま先立って飾りました。この聖なる岩の上で、神パタラの像が彫られていました。この神を、この地の人々はすべて、祈っていました。イスナは、彼女のリースを像の足元において、ひざフィリピンの神話と伝説 25 . 太陽の神の愛

まずいて、彼女の祈りをしました。彼女の父と友人たちすべてが長生きし、しあわせに過ごせるように。

彼女の朝の儀式が終わり、イスナは、村の端にある彼女の家に帰り、父マギノを助けて、毎日の仕事と彼の食事の用意をしました。

彼女の父は厳格な人でしたが、彼女は父をたいへん愛していました。彼は地域の人々から尊敬されていて、彼は先祖から継承した祈りの人で、彼は愛する娘にそれを受け継がせることになっていました。

今、イスナの知らない所に、彼女の賞賛者、太陽の神がいました。毎朝彼は、火の戦車に乗って、暗闇から出て、昼間を暖めるために空に駆け上りました。彼は砂を遠くから、川で水浴びをしているところ、植物や花に水をやり、パタラ神に敬意を払っているのを見ました。

ああ、太陽の神は、人間として地球の上を歩くことを切望しました。そして、イスナの美しい、やわらかな肌に触れ、彼女の暖かな、魅惑的な唇に口づけし、ものやわらかい、絹のような髪に指を走らせたかったのです。彼は、くる日もくる日も、見るために、空の横断する道を行きました。そして、太陽の神が、火の戦車で空を駆け抜けると、月に道を渡さなければなりません。彼は重い気持ちでそうして、孤独な夜を過ごし、次の日を待たなければなりません。その時、彼はまた、美しいイスナをもう一度見られるのです。

午後遅く、太陽は沈みかけました。イスナは父の家に帰る前に、小さな木の陰で、短い昼寝を、横になってとりました。

太陽の神はゆっくりゆっくり、火の戦車で空から地平線の裏に出て行きました。彼は木の下で美しく平安に寝ているイスナを見ないわけにはいきませんでした。

彼はやわらかで、天真爛漫な唇に口づけしなければ、夜、休むことができませんでした。彼は、彼女を抱しめて、火の戦車に乗せて、彼の世界に永遠に連れて帰りたかったのです。しかし、彼は戦車の炎が美しいイスナを呑みこみ、殺してしま

うことを知っていました。

しかし、彼は愛するイスナを見ることなく、夜を過ごすことができませんでした。そこで、太陽の神は、光に口づけして、寝ているイスナに向かって送りました。太陽が口づけした光は、しっとりしたイスナの唇に輝いて、注がれました。イスナは深くため息をつき、若くハンサムな男に口づけされた夢を見ていました。

イスナが起き上がった時、彼女は唇に指を当て、彼女は夢を見ていたのであって、口づけされたのではないことを悟りました。太陽の神は、ゆっくりと地平線に沈み、しあわせでした。イスナが彼の愛の口づけを受け取ってくれたからです。

何ヶ月か過ぎて、イスナの父マギノは、娘の体のかたちがかわっていることに気付きました。彼はすぐに、おぞましいことを悟りました。イスナが子どもを身ごもっているのです。

怒った父は、すぐにイスナに問いました。村の青年たちの中で、だれが彼女を誘惑して、彼女と交わったのか。どんな男にも触れていない、とはっきりとイスナは否定しました。父は、彼女が妊娠していることに驚いたことと同じくらい、そのことで驚きました。

もちろん、彼女の父は、娘が否定したことを信じませんでした。そして、彼女が嘘を言っていると思ひ込みました。そして、そのことは、もっと彼を怒らせました。

ふたつの嘘の罪を父に言ったことと、彼女の高貴な家庭に恥をもたらししたことによって、マギノは、イスナを家から出し、二度と帰って来ることを禁じました。彼は、完全に彼女を勘当し、もう会いたくありませんでした。

困惑し泣いたイスナは、恥ずかしくて頭を下げ、父の家から走って出ました。彼女は森へ走って行って、空き地を抜け、毎日世話をした花や植物の間を通過して、彼女が疲れて、もう走れなくなるまで、走り続けました。

イスナは自分が暗い森の奥深くにいることを知りました。そこは、今まで見たことのないところでした。彼女はぞっとしてひとりでした。しか

し、走り疲れ、泣き疲れていました。彼女は暗い木の下、葉の上に横たわり、目を閉じて、深い眠りにつきました。

イスナは、それまでだれも冒険しようとしなかった、この深い森の所に留まることにしました。そして、たいへん長い間、他の生き物の存在に出会いませんでした。

イスナはついに美しい女の子を産みました。そしてふたりは、暗い森で、しあわせに暮らしました。世から離れて、お互いの愛を満喫しました。時々イスナは、あとに残した父と友人たちについて悲しく思いました。しかし、もう会うこともない人々について考えることは、無駄なことだと思いました。

彼女は特に、川、植物、花と分かれたことを淋しく思っていました。彼女は毎日水をやり、暖かな太陽の光を受けていましたが、それらは、森のこの深いところまでは、入ることができません。

しかし、彼女は美しい娘と生活を分かち合うことで、しあわせでもありました。彼女はユミと呼ばれ、金と茶色の肌をして、丸い顔、美しい茶色の目が太陽のように輝きました。

その間に、イスナの故郷では、彼女が出てからたいへん悲しいことがありました。森の空き地の木と植物は、だれも毎朝水をやりに来てくれないので、枯れたり、しおれたりしました。草でさえもはや緑色ではなく、イスナの愛情ある世話が欠けて、活力のない茶色になりました。鳥のさえずりも、もはや甘くはありませんでした。

イスナの父マギノも、娘がいないことをひどく淋しく思い、明るい笑顔をもう一度見たいし、また、彼女の甘い歌を聴きたくなりました。父は、娘を冷酷に扱ったことを後悔し、ある日、イスナを探すように、そして見つけるまで帰って来ないように、命じました。

何週間も探した後、マギノの家臣たちは、ついに森の深い暗闇に冒険して、イスナと娘のユミを見つけ、森から出て彼女の家へ連れ戻しました。

マギノが娘をまた見た時、彼は感動して涙を流し、誓いました。彼はもう二度と家から追い出し

はしない、と。彼はまた孫娘ユミに会えてうれしくなりました。彼は娘と同様、たいへん愛しました。すぐにマギノは、町全体が美しい娘の帰還の喜びを分かち合うように、人々に命じて大きなお祭りを用意させました。

イスナは家に帰れてたいへんうれしくなりました。そこは、彼女の愛した場所だったので。しかし、祭りの食事の準備を手伝う前に、娘ユミをパシ川に連れてゆくことにしました。そこで、共にふたつのテラコッタの瓶に、縁まで新鮮な水を満たし、すぐに急いで空き地へ行って、かわいた植物や花に水をやりました。

魔術にでもかかったように、植物と花は、甘い水を花びらや葉にかけられたとたん、完全に生き返りました。これらの色は、すぐにそれまでよりも輝いて見えました。そして、葉は活気のない茶色から、かがやく緑になりました。

イスナは、また輝く植物や花に囲まれて、幸せでした。そして、鳥たちが歓迎して、もっとも甘い歌を歌ってくれたのを聞いた時は、もっと幸せになりました。

町は、その日遅く、祭りが行なわれ、町の人々は美しいイスナがまた帰ってきて幸せでした。そしてユミを熱狂的に歓迎し、愛しました。彼らはイスナの父に、また娘と暖かさや幸せが戻ってきて、満たされていることを見て喜びました。

マギノと町の人々は、神バタラにその町がまた幸せな所になったことを感謝しました。その時から、毎朝、陽の昇る前、イスナは、幸せな娘と川へ行き、体を洗ってから、空き地で植物や花に水をやりました。

そして、毎朝太陽の神は、夜の終わりを、炎の戦車が空を駆け上ることで示しました。彼は美しいイスナをまた見ることができ、美しい娘ユミを見た時、幸せは倍になりました。その暖かさ、輝く微笑は、たったひとりで、暗い夜に残される彼を支えました。そして、彼は確信しました。彼の暖かな光は、イスナとユミに輝き、彼らの生きている限り、毎日注がれる、ということ。